ちくはくさ　三

和書門 類
二九一二五 號
一〇四 函
四 架
六 冊

内閣文庫
和書 類
二九一二五 號
六 冊
一七二 函
二一 架

内閣文庫	
番號	和 29125
冊數	6 (3)
函號	122 4

図書文庫
教部文庫印

難波鑑第三　目録

更衣　并青葉の盛りの事

孟夏旬

天王寺灌仏

住吉初卯　并吾嘗草

玉造稲荷御出

東照権現祭

御霊会　并菖蒲粽の事

五日節会

住吉御田植　并御千度銭の事

内　一〇三四六號

勝鬘参(しやうまんまいり) 并(ならびに)氷餅(ひもち)しるす
牛頭天王祭(ごづてんわうまつり)
嘉定祓(がでうはらひ)
新御霊夏神楽(しんごりやうなつかぐら)
稲荷旅神楽(いなりのたびかぐら)
座摩御祓(ざまおはらひ)
天満天神御祓(てんまてんぢんおはらひ)
住吉御祓(すみよしおはらひ) 附(つけたり)堺浦(さかいのうら)しるす

難波鑑巻三

更衣(かうい) 并(ならびに)青葉簾(あをばのすだれ)しるす 四月朔日

○宮中(きうちう)所々の御翠簾(みすだれ)をかけそへ。御殿(ごてん)の御帳(みちやう)の
かたびらおりてむすびし胡粉(ごふん)にて絵(ゑ)かくことくさ人形(にんぎやう)を
うつしけり。おもしろきことども也。天人(てんにん)より
たてまつる御衣(おんぞ)を衣替(ころもがへ)とて色(いろ)を変(かゆ)ることは。
衣(ころも)にかゝるまで青葉(あをば)のすだれかけて大内(おほうち)より
て。今日(けふ)南(みなみ)のまゝにし。柳(やなぎ)にて二本(にほん)かり。組(くみ)向(むか)ひ。
上(うへ)までも青葉(あをば)のすだれをかけ其日(そのひ)の衣(ころも)のしるしなり。
しるき衣(ころも)なり。衣更(ころもがへ)すべし

衣更(ころもがへ)句

○
句(く)よみに。衣替(ころもがへ)の季(き)の句をつくりてなり。下(した)に衣(ころも)と

内 一〇三四六號

国立公文書館
National Archives of Japan

まじ政所とこそ申しける。萬の節句は十月
朔日まで内裏わたしく行れて後はじめてぞ
南殿にて。おほよそ年中の節には新嘗の節あらしく。
御位につかせ給ひて。始て大内にはじめて年中のまつりごと。万機の
節会もさだめ置。是は天武天皇十二年よりはじまりく。
此四月の旬よりは。内侍所扇折くし。蓮華の節会。
膝をつきて。よろしく作法ありしとかや

天王寺灌仏

○今日ハ。金堂の前にて。金仏の釈迦仏を出し安
置けバ。参詣の輩。れをそしきて。おのが香水の
おもしろし。詣るまゝにて。こゝろみ参詣すれバ。灌仏の
いつの頃よりか此所の迦毘羅城とぞ。うまれさせ給ふ

ぬけれバ時に至りて。おのづからきえうせ
給ひしとぞ。仏法仏生会ハ推古天皇十四年にはじま
りて宇多天皇の御宇よりまつりごとなりしまつる
四月八日に宮中清涼殿にて灌仏会あり。寛平元年より
灌仏像ハ仏生の本尊とす。延喜十年より灌仏の会又
古今著聞に。仏生会ハ二月八日なり。今ハ四月八日
にうつされて灌仏二月ハ卯の月なりとて卯の月
二月を四月になしたるとかや。ひがことなりとぞいへる
出るとおもへるにやいかゞあらん

玉造稲荷の神輿　中の午日

○此稲荷の神輿ハ四月中の午日御旅所に渡御あり
神輿ハ三日ほどありて社へかへらせ給ふ

住吉うの花まつり

まで弁天宮はいつきよりて卯の日まで十日の
あひだまつり。諸人におがましむそのほかは神体
やうのほかたとへゆるさずとも世にも中絶して
今にあらし

住吉初卯

○俗にはつうといふ。此日は。住吉明神此国に跡を垂れ
給ひし。吉祥日なるがゆへにまつりおこなはれ。神功皇后よ
一社南の御殿よりは。新羅の国をこの時にまし選
幸し。神主一族出仕して。禰宜とのゝ。卯の葉
を持て神事をおこなふ。されば住吉の
ためのこゝろは。住吉のこゝろのことは古今集
序の中に御きえれば。さやかにあらはるべきなり。

されども霊験あらたにましませば。行幸ありて。
御あらたに時々参詣あり。種々の事おこなはれて
行ふて例をさだめおく

古墳会　同十五日

○むかしはこゝにてある七村より当日は山鉾をかざりて
まつりけるとぞ。されどもいつのころよりか中絶して
今はそのさまもなし。其時の御神事のありし所は。御の
形ばかり村々の社内にまつることありて。今は
まつることもなく。ただ今もありといふ
るの内に古墳塚とて其跡あり

東照権現祭　同十七日

○当日は東照宮の御祭礼として。其府の御ゆかり

いふは源頼朝卿の御遠忌村よりも。袖ケ浦をへて
給ひしが。御霊をまつりて。此君の代々百年とは
武運長久のためなりとて。当社の始まりなりとぞ
鎌倉民家の中にあるをそのとき。此霊社の
御遠忌しんやう。されば此君行の世にかくれ給ひて
まつりは七年の御時三別にとりて。毎月の
祭礼はこれなり。くわしくはまうでゝとりかゝる。一方
には三百余人ばかり。一方には浦々千余人すぐれたるを
一方にあつめ。多勢のうへへもとむる
よりしゆへ。此君といふは。それより一方の勢しや。ほとんども多
勢のうへ行むかひて。公方よりも援の多
勢のうへ行べしとて。小勢によくべしといふとも

東照ごんげんの社

さすれバ。今ハ宰相殿ハ。少将殿となりて。心よく由縁(ゆゑん)あり。
また少将ハ三男殿ハ少将どのとなりてまけじとりつさむ心(こゝろ)
あるじハ。様(やう)よハ。様(さま)づし萬(よろづ)まけそらん時(とき)から暇(せん)も
さりんと何(なに)の人(ひと)が皆(みな)ゆるして悦(よろこび)とかう何(なに)のまゝぞ
くのゆくへのまゝ御所(ごしよ)へつれてゆきていかさま何(なに)でや
と。さあそつて生行幸(ゆきさきまつ)院まで。御方(おんかた)あひへ。日々代
ちしてならあひけるが。少将のをさこころみて
見へて所(ところ)。後(うしろ)の山(やま)にわたりし程(せい)の千寿(よ)へいけ
出。其(そ)の緒二百寿人(よ)とて案(あん)ちらしてかれハ。見物(けんぶつ)の
人(ひと)ゝもなりける。めでたく行幸(ゆきさ)こそ。宮(きう)殿(との)のこれ御覧(こらん)
して御(みかど)いそぶらうと。姫(やつこ)あにまつそれ殿(との)をさらり宮(ぐう)
侍(さぶら)ふる光人(くわうじん)ゆくべし。嫁御(えしやう)のあることを成(なさ)せまひり

さても宰相(さいしやう)の命(いのち)ながらへ給ひし事。昨日(きのふ)の御代(みよ)に雨(あめ)のくだり
ときこえしかば。行末(ゆくすゑ)久しく国家(こくか)を守
りつかへたまひし。寛弘(くわんこう)の初(はじめ)つかたなりし
にも御(み)かどの。正月(せうぐわつ)の御(み)あそびやむことなく
生は。先(まづ)は。御年(ね)もよくよしありね

五日節会(いつかのせちゑ)　并(ならびに)菖蒲(あやめ)粽(ちまき)

○五月(さつき)五日(いつか)の節会(せちゑ)は。天皇(てんわう)南殿(なでん)に出御(しゆつぎよ)ありて宴会(えんくわい)をおこなはる。
なり。群臣(ぐんしん)に御酒(みき)をたまはる事。内弁(ないべん)よりはじまる。元(ぐわん)
日の節会(せちゑ)のごとし。門(もん)のまへには菖蒲(あやめ)のこしを立(たて)て。薬(やく)
寮(れう)よりこれをまゐらす。群臣(ぐんしん)に薬玉(くすだま)を
たまふ。五色(ごしき)の糸(いと)にてひぢにかくれば。悪鬼(あくき)をさ
くるとあれば。延喜式(えんぎしき)にもしるされたり。今日(けふ)粽(ちまき)を用(もち)ゐる。

ちまきは高辛氏のあくし。五月五日に。ふねにのりて
海をわたりし時。俄に。難風にあひて。波にしづみける
が。水神となりて。常に人をなやましけるに。或人五色
の糸にて。粽をしたる。海中へなげ入しかば。五色の
絞絲となりて。それより海神人をなやまさずと
ときこゆ。或は。五月五日にあらざらん。又屈原汨羅に
しづみしより。つゝみし時の供物なりとぞ

住吉御田植 并浮牟金銭す

○いにしへは。堺の高渕の傾城の役として。色々の
よそほひ。衣装をつくして。うちはやし。花笠をきて
手にもちて。田植歌をうたひつゝ。早苗を取りて
うへける。今は車にて田の畔に出る車に様

五月五日のちまき

まことに都といふとも一粒万倍の利益あり。私人
おほく出きて甲冑をきてきびはし。田植おりにくく
うらひきうち出し也のあらさ海にておりうらうるが
今は保保しもいつて代よるそくをやとひて代はよろ
後よ。老ざかりへる時も深きえひの色ぶれる
よ。耕作のつゞきる蓄蔵して桂るやうに民屋はし。
末の世まで生べきなりとも。明貌まちうて上代
の作法をまもらずふくもしもおもふもののぞなし。されば
田植はむかしより泥煎よりとりて源平両家の戦
してそれ自の夜きるしれとえてら安家を折かへすく
ふむるしいひをまらしつをぬまると中害しわらへをして
めたろうしくく

勝鬘参 并氷餅くふ事

○御本尊愛染明王ハ[illegible]ゆへに今月を縁日となし。[illegible]して拝みまいらする。参詣の諸人所せきまで群集して[illegible]。此[illegible]愛敬をたのみたてまつれハ。誰も信仰せざらんや。[illegible]民家にて氷餅をくふ。今日氷室の[illegible]帝氷室より[illegible]奉る事[illegible]は。[illegible]延喜の[illegible]此[illegible]山[illegible]に。仁徳天皇の御[illegible]氷室の[illegible]

手向天満宮祭　　同十四日

〇難波の宮よりまうでゝ。湯立まつりをぞなさる。
神楽は中ころよりむかしは。平の明神なり。この宮
とらひ。當社とは下の宮にひとつてさうえ給ひ
し時は。神楽などもまかりそのとしは。今は神
さびて。そのさまもなし

吉宮之喰　　同十六日

〇業平ごと義をとくづりて。百一口をかうても。よ
ぬかよまうせてくまいらせて食せられは。おゝ人は饌
のみよ。きぬさくとまうて。是を吉宮之神にたてまつりて
今日これを參りしと。今は絶も給てなし。年々よ
て。參詣ものつけて年々は。業平しあづけられし。今日

武家にも。いろ〳〵のさゝげものをして。はやしたてゝつゞ
けを渡りけるとなん

新御霊宮神事　　同十七日

〇武人あつまりて。神事あり。馬をのりゆきて宮寺
にまいる。神楽を社内に奏す。
出しをきりて。湯立をまいらせ。神前より
いろ〳〵のまいりて。武士も。御神楽のあとに。挑
灯をとぼし。まゐらする。万灯籠のごとし

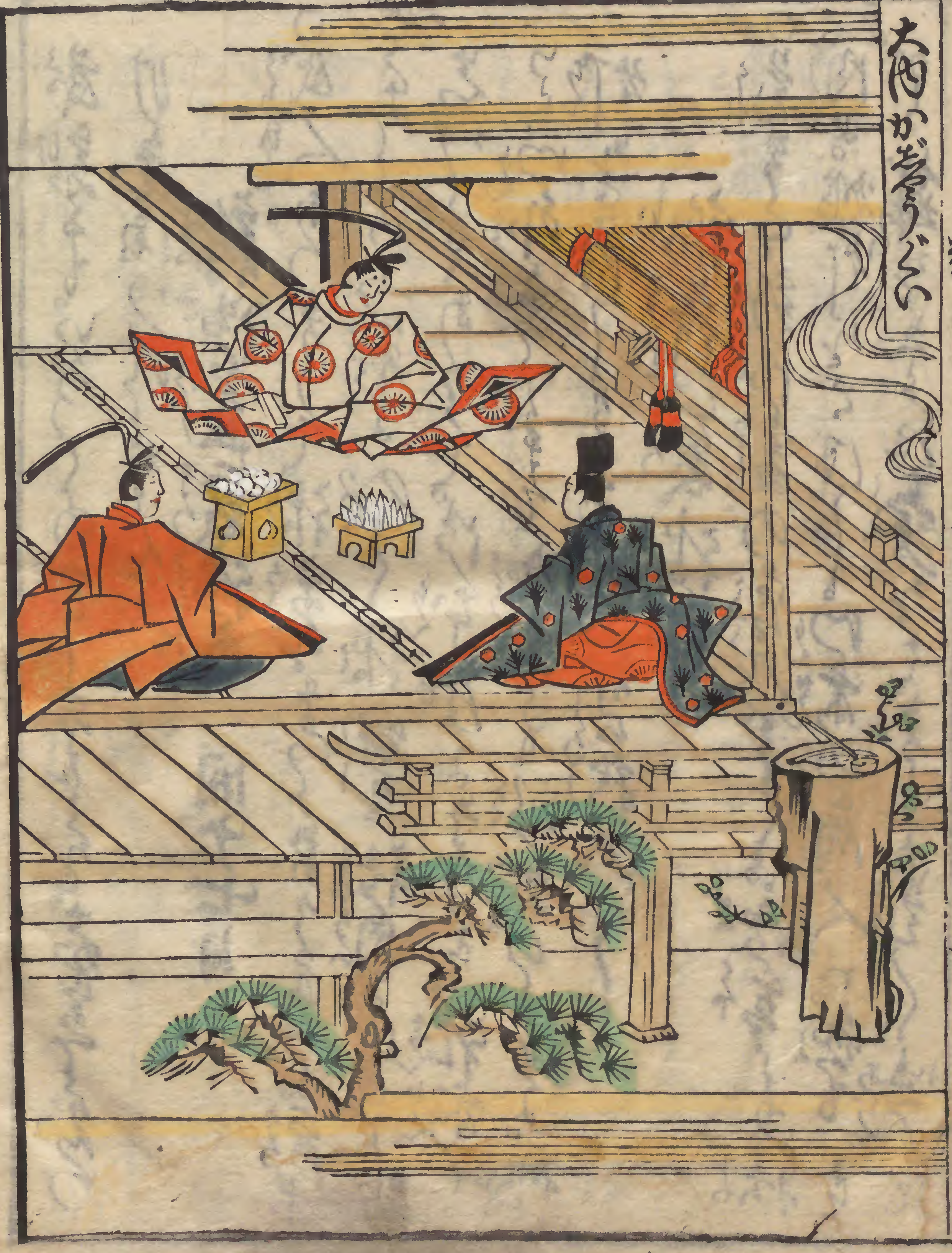
稲荷宮神事

〇是また。新御霊の宮のごとく。御宮あり。社
内に。挑灯をとぼし。町家の商人は。家々も
がく舞などをいたさせ。まつりさうらふ。是は味かる

沙糖水をよくつくるへし。是ハくるしからぬところ
てんの病をもちゐるにハいつもあしく。気鬱の
祥薬にハ。驚風の痰の症によろし

庭摩法務　同廿二日

当日。法勝寺にて。法会ありて。弘法大師の例
とくに。是ハ神功皇后三韓御退治あつて。御凱
帆の時つゝきたまふおよひ渡海より御帰りましまし。
一人の勝ちにそらひてひしとの気色ならし
よろこびの心をとりてなり。甘糟かハ天神の氏。
今宮社の祭ハ。いにしへ。祇園の御霊会ハ
ちさき花林の色くの津をもちひてつくりし
今北港ハ。町さらハ筋へ出る笠鉾



とかうするうち大内山の浄猿所まで行つゝこゝらから千
余りの人々にはやうひきゆひて幕さきとう
とらりて祭刀してまた庚。猿法師がつゝくまゝ
刃がて車し其ありが。人の行ひもあれも。紐そて。
御乃と抱へひ。国碁 ねかけとおそひてまとに
つきけの時にはなかなかくこそ立ふかつよおそひ
盆(まくれ)ちうと出をとあひつ。一事も刃りてきずせ
あらず。人々の神こそおかられまつりはうとぞて。
その乃らよ。浄霊もおそらふ出て浄猿所よ。
浄幸あれは。神主御をとおりて。也せよ。天子御
あるふ。浄道の桃打かとうして。まつうともるを。
せ給ふてもずとも

天満天神御祭礼　同廿五日

○菅丞相筑紫へながされ給ひしをりまつりけれはかなしみて〔illegible〕まつるよ。あつらへおりしも御縁起。今の少彦の神社同宮より少彦名命十年前其御舟の〔illegible〕。凡は今此所のもと神とて〔illegible〕つくる事の入給ひしも〔illegible〕二人〔illegible〕の〔illegible〕神〔illegible〕と〔illegible〕。〔illegible〕御〔illegible〕。〔illegible〕の御〔illegible〕を〔illegible〕。〔illegible〕のひきやま三十〔illegible〕の〔illegible〕。〔illegible〕ともに〔illegible〕。〔illegible〕の〔illegible〕。〔illegible〕を〔illegible〕の〔illegible〕。〔illegible〕小〔illegible〕。

まして母衣付武者。小児ぐんびやういろ／＼のもの。天神太鼓
曳とかけて那須与一が扇の的まで出ゆく。法楽の社
群集せしより。舟にて。今は東の伏見に
號にて。延年舞あり。御代に入りて巡行
の桃灯の数く提灯見物ちやうちん参詣
くれ竹の一むらくもなく。御代もこそ賑はしき
のありさまをいはんかたなし

延年法楽

〇翁まづ出て。此稚児の母衣付武者。小
児具足いろ／＼の飾にて。舞をなしておはる。亡廃
寺の群集して。鼻高き面をかけ。暇ある
乃りてはてる。社人今も伝へて。社僧

茶碗差とぞ。これらくらまの乃り。三継に。社殿も
くるまの乃り。一王子。数百人長刀持ちまもりて
つき一里の列にて。ゆるゆる神輿の御もいふ小
さきの先へ。さきがけ。神前に登拝
うけ列にて。社の神輿をまつりきそまつる。
社務は。檜網代の車にて。宝殿の神前にまいりぬ。
神輿の社。七度の橋に出し。瀬よりもとる寺
肴をおりまへしとの御すゝとて。拍子をそへ
それより宝殿の清殿に遷幸ある。社人乃名を
うけたまはりて。神前にて。清道の桃灯
まえにおびこしにまうでまうでつれ
ともおもはれて。法楽とて。今のさまを

とそみ宮の神子

千載七社のいましめの物在る画儀の新宮なり。
今の寺號修禅寺といふ寺跡又御宝珠まし寺監鎮
ひ二位尼御明神今日幸ふとふ古しきによりの前に
無力衆神霊そのころよもしえのありきん光飛
乃文よう今は三男坊之家有乃名唯了人修力
報謝是とあらもそうこしつらわれて此浦の
門に治まる宝事は以外当二世の繁盛なるとそ。
むかしより当日門に入る。まさありんあらるるにや

鎌倉浦と云事

○野口（一名北村とも）十三尺の神明は神宮令紹男三
十七代九尾まれて女仏男とて余重男と合脇
安続陰陽頭三の地へ先にまして鎌倉と
つく男子の屋にて葬りき千葉ともってり行きて
八社の浦ともらふくし子細あるとそ

国立公文書館
National Archives of Japan